

ハイデッガーと心身問題

星 敏 雄

Heidegger and mind-body problem

Hoshi Toshio

ハイデッガーが彼の主著『存在と時間』前半部を構想、執筆している時、「心身問題」がその念頭にあり、その問題との格闘の中から彼の「現存在の実存論的分析論」が成立していること、いやそれどころか、「存在の意味への問い」によって性格付けられる、ハイデッガーに固有な「基礎的存在論」が実はこの「心身問題」との格闘から重大な動機を受け取っていること、これらのことは、ハイデッガーの解釈史の中でも指摘されたことはなかった。¹⁾「主観」や「人間」という伝統的な哲学術語とは別の「世界＝内＝存在 In-der=Welt=Sein」や「実存」、「現存在 Dasein」という術語をハイデッガーは選択したが、それは単に言葉の問題ではない。ハイデッガーの「現存在」はつまり「人間」のことです、などと我々は時に解釈説明する。サルトルの人間の実存にハイデッガーが反対したことはフマニスムス書簡で明らかである。²⁾「現存在」は人間のことですが、ハイデッガーは人間という言葉を嫌いました。だから、厳密にはそれは人間ではないのです、では事態は明らかにならないであろう。「現存在」というハイデッガーの術語に籠められたハイデッガーの意図は何であったのか。人間や主観との同一性と差異性は？ 勿論「心身問題」にはその拡張版として「主観＝客観＝関係」の問題、つまりいわゆる「近世的二元論」という問題が潜んでいる。それに対するハイデッガーの立場はどのようなか。ハイデッガーは現存在をどのような存在と規定したのであるか。彼は、うまく「主観＝客観＝関係」の問題や心身問題から逃げられたのか。このような問題視点からの検討をハイデッガーの『存在と時間』は許し、またそれに十分に耐え得るであろうか。³⁾

しかし、心身問題との関わりにおいては、実は「時間」の問題との関係が深刻である。周知の事だが、『存在と時間』では、最終的には存在を理解する「超越論的地平」として「時間」が、つまりこの場合テンポリテートだが、取り出されてくる。この時間という問題性がハイデッガーに到来するのはどのような形でかというのは、十分

にこれまで究明されてこなかったきらいはある。ところがハイデッガー自身この「心身問題」との密接な、いやそれどころか本質連関的な関係を言明しているのである。つまり、心身問題という、哲学にとって古代ギリシャ以来スキャンダラスな問題群を手掛りに、ハイデッガーの『存在と時間』を読解することで、我々はその著作の核心に迫って行くことを、十分期待できるであろう。我々はやがて「時間」の「存在論的機能」にも言及し、心身問題や「主観＝客観＝関係」とのハイデッガーの『存在と時間』における対決が、『存在と時間』という書において時間に関しても本質的であったことを示すであろう。ここでは以上の問題設定が実際にハイデッガーに忠実であることを、文献を引証して証明することに力点が置かれる。

I 「心身問題」とハイデッガー

ハイデッガーの心身問題に対する言及から、『存在と時間』における、ハイデッガー自身による様々な概念装置を、一つにはこの心身問題との対決によって形成されたものと見るができるように思われる。そこからさらに、『存在と時間』におけるハイデッガーの概念装置を、相対化、問題化、またはハイデッガー自身の言葉を使えば、それらを「実際の探究の主題として問う」(SZ 7)という考察態度を堅持して問うことが可能となってこよう。⁴⁾つまり、古代ギリシャのプラトン・アリストテレス以来の心身問題やデカルト以降のいわゆる「近世的二元論」のスキャンダルとしての心身問題の系譜の中でや、現象学のその後の展開、つまりサルトルの現象学的身体論やメルロ＝ポンティの身体論の中での、ハイデッガー自身の心身問題への態度を位置付けるといふ方向や、我々自身の現代のありうべき身体論からハイデッガーの試みを評価するといふ方向である。しかしいずれにしても、現在我々が手にしている、既に印刷されたハイデッガー釈解には、この方向からの研究、アプローチはない。それ故、このようなアプローチは何か、奇をてらった解釈であるとか、現代の二つの哲学的潮流を無理に結び付けようとしているとか、誤解される恐れが十分に在る。後者については「心身問題」とは哲学の始めである古代ギリシャの昔から在る問題であり、肉体という牢獄から解き放たれて、魂の思考の世界へ上昇するという、あのプラトニズムにも土台があることを指摘しておきたい。これが、よく議論されるように、特殊近世的であるかどうか、つまりデカルト的・二元論にのみ由来するのか(私は疑問に思っており、いつの日か問題すべく準備中であるが、)それは、ここでは一応ペンデングつまり不問にしておくこととする。なんといってもハイデッガーが近世的・主観主義を批判しており、近世哲学を「主観＝客観」の二元論で見ているからである。さらに、我

々は自己とか自我とか、哲学するおのれとかを哲学に持ち込む時、その存在論的身分を考えなければならず、当然その身体を問題とせざるをえないのである。もし、現象学的なアプローチを継承して真摯に哲学してゆくならばである。

ここで試られるアプローチは、現在のハイデッガー研究にないアプローチであるので、我々としては先ずは、ハイデッガーに忠実に、原文を引用しながら、ハイデッガーのこの問題に対する発言、事実関係を確認するという手法で足許を堅固にすることを目指し、なによりも、問題の所在を突きとめることを、この論文の暫定的目標とする。ハイデッガーも言うとおりの、問題が旨く立てられれば自ずとその答も突き止められている訳であるからである。

心身問題へのハイデッガーの言及を、アトランダムにテキストから取り出してみよう。ハイデッガーが心身結合、心身問題を明らかに名指しているのは、次の二箇所である。

- 1 「しかしながら人間の实体は[・]霊[・]魂[・]と[・]肉[・]体[・]の[・]総[・]合[・] Synthese von Seele und Leib としての精神ではなく、実存 die Existenz なのである。」(SZ 117)
- 2 「現存在は[・]肉[・]体[・]という[・]物[・]質[・] Leibkörper が満たしている 空間部分の内で事物的に存在しているにすぎないのでは断じてない。……現存在が空間の内で或る位置に事物的に存在していると言いうるためには、われわれは、現存在というこの存在者をあらかじめ存在論的に不適切に把握していなければならない。……現存在の空間性は、[・]精[・]神[・]と[・]肉[・]体[・]との[・]結[・]合[・] Verknüpfung des Geistes mit einem Leib という宿命にもとづいて実存 Existenz につきまといっている不完全性だと、解釈されてもならない。」(SZ 368)

この箇所にははっきりと心身関係とハイデッガー自身の立場の相違が述べられている。ハイデッガーは、後のメルロ＝ポンティとは違って、「身体」、「肉体」に定位しないように一見みえる。身体と精神または靈魂と分断した上でくっつけるつまり総合することには、ハイデッガーは、後で見るように、明らかに反対している。「人間の实体」は「心身の結合」ではなく、「実存」、「現存在」であるとされる。「人間の实体」を「事物的な存在」であるとするのは「現存在」の「存在論的に不適切な把握」によるという訳である。この引用の1、と2、は、ハイデッガーが心身問題を意識化して自らの問題設定を行っていたことを証示している。次に、明示的ではないにしても事象上はやはり、心身問題に関係している箇所を、抜き出してみる。

- 3 「ひとが肉体的・靈魂的・精神的統一 leiblich-seelisch-geistige Einheit と把握するのに慣れている、全体的人間の存在が問題となる。肉体、靈魂、精神は、

これはこれでそれぞれの現象区域を名指すこともできるが、こうしたそれぞれの現象区域は、特定の探究の意図のもとでそれだけで主観的に分離可能である。……しかし人間の存在に対する問いにおいては、人間というこの存在は、肉体、靈魂、精神という……存在様式に基づいて、それらの総計として算出されることはできない。」(SZ 48)

- 4 「内=存在は現存在の一つの存在機構を指しており、一つの実存範疇である。だが、そうだとすれば、内=存在ということでもって考えられているのは、或る身体事物、人間の肉体 eines Körperdinges (Menschenleib) が事物的に存在している或る存在者の内に事物的に存在していることではありえない。」(SZ 54)
- 5 「無世界的に存在していない存在者も、例えば現存在自身も、世界の内でも物的に存在しているからである。もっと正確に言えば、或る種の限界内では、或る種の正当さをもって、事物的にしか存在していないものと把握されうるからである。そのように把握するためには、内=存在の実存論的機構から全く眼を転ずるか、またはそれを無視することが必要である。」(SZ 55)
- 6 「現存在の空間性は、身体という物体事物 Körperding が事物的に存在している位置を指示してみたところで規定されはしない。」(SZ 107)
- 7 「見る Sehen は肉眼をもって知覚すること das Wahrnehmen mit den leiblichen Augen を指していない……」(SZ 147)
- 8 クーラ寓話を前存在論的例証としながら、現存在の存在を「気遣い die Sorge」として取り出してくる箇所では、このクーラ寓話での「気遣い」の優位を取り挙げ、
「気遣いのこの優位は人間を肉体（大地）と精神との複合体 des Kompositums aus Leib (Erde) und Geist だと捉えるよく知られた解釈との連関の中で明確に出現している」(SZ198) と言う。
- 9 「現存在はそれ自身或る固有の空間内存在を持っているのだが、この空間内存在はそれ自身としては世界=内=存在一般という根拠に基づいてのみ可能なのである。だから内=存在はひとが例えば次のように言うような存在的な性格付けによっても、存在論的には判然とはなりえない。つまり、なんらかの世界内での内=存在は一つの精神的固有性であり、人間の空間性は人間の肉体性の一つの性質であって、この性質は常に同時に物体性によって基礎付けられていると、こういうことでもってひとは、そうした性質を持つ一つの精神事物と一つの身体事物とが一緒に事物的に存在しているということ Zusammen-vorhanden-sein eines so beschaffen Geistdinges mit einem Körperding の許に再び立ち止って

る訳であって、そのように合成された存在者の存在そのものはいよいよもって曖昧なままである。世界＝内＝存在が現存在の本質構造として了解された時始めて現存在の実存論的空間性を見抜く洞察が可能となる。」(SZ 56)

- 10 「おのれが行う遠ざかりの奪取と同様に 現存在はこれら左右の 方向をも不断に携えているのである。現存在の肉体性 *Leiblichkeit* はここでは論ずることのできない固有の問題性をそれ自身の内に蔵しているのだが、……」(SZ 108)

これらの箇所はリテラルには心身問題を指示していないが、事象上は心身問題を指示していると考えられる。引用3は人間存在は肉体と靈魂や精神の「総計」として算出できないということを示しており。引用4はハイデッガーの世界＝内＝存在の一アスペクトである「内＝存在」は、事物的身体が事物的世界の内に事物的に存在しているのとは異なるという指摘であり、その限り、事物的身体性を否定している。引用5は現存在の事物的把握も可能だが、それは限界があり、実存的把握の無視か一定の手続きによるものであると指摘する。つまり、二次的なのである。引用6は現存在の身体性と身体の事物的位置が別物であること、引用7は見るとは肉眼で見るのではないことを指示している。では何が見るのか、知性か、脳か、神経かという具合にこの問題は発展し行くが、ハイデッガーはどのようにこれを解釈するのか興味深い。ある論者も言うように我々は「確かにこの眼で見た」と言うのである。もっとも、この眼で、つまりそれを使って見るのであって、この眼が見るのではないだろう。(ここは問題呈示であるから、詳細はここでの仕事ではない。)引用8は心身結合と(現存在の存在である)「気遣い」の関係の指示である。ところで、ハイデッガーは引用9で現存在の空間性を認めており、それは心身合成によるのではなく、世界＝内＝存在に基付くとする。勿論現存在の「空間性」と現存在の「身体性」＝「肉体性」は区別されている。引用10でハイデッガーでが指示する「現存在の肉体性」はなんであったのか、探究されるべきであろう。つまりメルロ＝ポンティやサルトルの主題であった「身体」をハイデッガーはどう考えたかがそこで問題となるにちがいない。

Ⅱ 「主観＝客観＝関係」問題とハイデッガー

さて、心身問題は、結局それがいわゆる「主観＝客観＝関係」の分断という二元論に基づいている以上、より拡大された心身問題として、「主観＝客観」問題をも孕んでいるのは、自明である。「主観＝客観＝関係」という言葉はハイデッガーの現行の『存在と時間』の中に三箇所見て採れる。(Subjekt-Objekt-Beziehung は SZ 59 と 216 にあり、Subjekt-Objektbeziehung は SZ 388 にある。)当然、明示的ではない

が「主観＝客観＝関係」に対するハイデッガーの『存在と時間』での言及は、人が予想する以上に多いものがある。

まず「主観＝客観＝問題」へのハイデッガーの言及をテキストから取り出してみよう。

- 1 「内＝存在というこの現象で表示されているのは、事物的に存在しているなんらかの主観と事物的に存在しているなんらかの客観との間の事物的に存在している交わり das vorhandene commercium zwischen einem vorhandenen Subjekt und einem vorhandenen Objekt 以外の何ものであろうか？こうした解釈の主張する所が、現存在はこの〈間の存在〉であるということだとすれば、現象的事態に一層近付いているのかもしれない。それにもかかわらずこの間に定位することは依然として誤った道に導くであろう。このような定位は、この間そのものがその間に存在している存在者を、存在論的に規定せずに発端に置くということを、吟味もせずいっしょに犯しているのである。この間は、**二つの事物的存在者の会合の成果**だと、すでに把握されているわけである。だが、こうした二つの事物的存在者を先行的に発端に置くのは、常にすでに、現象を爆破することなのであって、だからその現象を、その都度再び、爆破された断片から合成するのは、見込みのないことである。接着剤が欠けているばかりでなく、組立てがそれに応じて行われるべき型が爆破されてしまっている、ないしは、決してあらかじめ露呈していないのである。」(SZ 132)

極めて重要な指摘であると考えたい。ハイデッガーの基本的戦略が総て出ている。おそらくヘーゲル的な弁証法では「一にして同一の観点においてそれとそれ自身の反対を捉える」という原理に基づいて、両者の間 *Zwischen* に立つのであろうが、ハイデッガーのやり方は、それら両者よりも根源的な現象を見て取り、そこからその両者を派生的なものとして説明するという方法であると暫定的には定式化することが、できようか。爆破された断片を合成する接着剤が欠けているという訳である。ヘーゲルも統一は既にあるのであるから、と統一に議論を持って行く訳であり、両者の統一を前提している。だが、ヘーゲルの前提する人間とハイデッガーの前提する世界＝内＝存在、内＝存在が同じかどうか、問題となろう。ハイデッガーは後に見るように事物的存在性の理念を批判する等の従来と異なる視点があるからである。

- 2 真理が認識と対象の一致であるとして、「一致はとおりにという相対関係を持っている。どのような仕方においてこの関係は知性と事物との間の関係として可能なのであろうか。……真理構造を解明するためにはこの関係全体を単純に前提

するのでは不十分であり、むしろこの関係全体をこのような全体として担っている存在連関の内へと遡って問わなければならない。しかし、そのためには、認識論的な問題群を主観＝客観＝関係 *Subjekt-Objekt-Beziehung* に関して広げる必要があるのだろうか、それとも……」(SZ 216)

真理の場合の「主観＝客観＝関係」についての提言である。

- 3 「我有りと言う時の有るという表現は許でと連関があり、我有りは、これはこれで、我は何々の許で、つまりこれこれしかじかに親しまれているものとしての世界の許で住んでいる、滞存しているということなのである。我有りの不定法として、言い換えれば実存範疇として解された存在は、何々の許で住んでいる、何々と親しんでいるということを意味する。……世界の許での存在は、出来する事物が一緒に事物的に存在しているといったようなことを決して意味するのではない。現存在と名付けられた存在者が、世界と名付けられた別の存在者と互いに並存するといったようなことは、ありえない。」(SZ 54～55)

「主観＝客観＝関係」は現存在＝世界＝関係と同じではないという指摘である。ハイデッガー自らの現存在と世界の関係は「主観＝客観＝関係」の問題を逃れているというのであるが、次の引用4も同様の指摘である。

- 4 「世界認識という現象自身が捕捉されるに至るやいなやこの現象は一つの外面的な形式的な解釈の内へといちやく陥ってしまった。これを示す指標は、認識の発端を主観と客観との間の関係 *Beziehung zwischen Subjekt und Objekt* として置くという、今日でもまだ行われている慣行であるのだが、こうした発端は真理を含んでいると同様空虚をそれ自身の中に含んでいる。とはいえ、主観と客観は決して現存在と世界に符合しはしないのである。」(SZ 60)

- 5 「世界＝内＝存在という存在構造は存在論的には近付き 難いものに届まるにもかかわらず、存在的には存在者（世界）と存在者（心）との間の関係 *Beziehung zwischen Seienden (Welt) und Seienden (Seele)* として経験されているが故に、また存在は差しあたっては世界内部的存在者としての存在者を存在論的に頼りとして了解されている故に、今挙げた世界と心という二つの存在者を根拠にして、またこれら両者の存在の意味において、言い換えれば事物的存在として、これら両者の間のそのような関係を概念的に把握することが試みられる。世界＝内＝存在は、たとえ前現象学的には経験され識別されていようとも、存在論的には不適切に解釈される途上で、看取できないものになってしまう。……このように不適切に解釈された現存在機構は次いで認識論や認識の形而上学の諸問題にとっ

て明証的な出発点になってしまう。というのも、主観というものが客観というものに関係するということ、またその逆であること、このことにもまして自明なことがあるか？ この主観＝客観＝関係 *Subjekt-Objekt-Beziehung* は前提されざるをえない。とはいえ、それは一つの前提に止まるが……、この前提の存在論的必然性が、なかんずくこの前提の存在論的意味が曖昧のまま放置されている限り、極めて禍に満ちた一つの前提に止まるのである。」(SZ 59)

- 6 「認識作用が世界というものと主観の交わりを先ずもって創り出すのでもなければ、この交わりが主観というものに及ぼす世界の影響から生じるのでもない。認識作用は現存在の一つの様態であって、この様態は世界＝内＝存在の内にその基礎を持っているのである。」(SZ 62)

引用5と6はかなり重要な箇所である。世界＝内＝存在は、「存在論的には近付き難い」ので「事物的存在」の理念に基づいて、世界＝内＝存在が「世界と心の関係」としてつまり「主観＝客観＝関係」として「存在的」に経験されてしまう傾向があるとハイデッガーは認めている。ただし、世界＝内＝存在は「前現象学的には経験され識別されている」のであるとハイデッガーは言う。ここは問題となるところである。引用6では認識作用というものは、世界と主観という二次的なもので、世界＝内＝存在という一次的なものに基礎付けられるという指摘である。そのような形で、二次的という言い方だが、「主観＝客観＝関係」が認められていると言えよう。一次的なものが二次的になる必然性を、だがハイデッガーはきちんと押さえていたのだろうか。ヘーゲルの場合はそれこそが最も主要な問題であったと解釈されるのだが、ハイデッガーではどうであろうか、それは問題化されなければならない。次の引用7引用8はこのような「一次的-二次的-関係」を考える上で極めて問題적であり、刺激的ですらある。

- 7 「現存在は、現存在がさしあたって閉じ籠められているおのれの内面から先ず出て行くのでは決してなくて、おのれの第一次的な存在様式から言って、常にすでに外部に存在している……対象の許でこのように外部に存在している時ですら現存在は、正しく解された意味では内面に存在しているのである。」(SZ 62)

- 8 「認識されたものを知覚することも、捕捉しつつ外へ出て行くことが獲得した獲物を携えて意識という容器の内へと逆戻りする事ではなくて、知覚、保存、保有の作用においてすら、認識を営む現存在は現存在としてあくまで外部に届まっている。……私は本源的捕捉作用の許で存在しているの劣らず、世界における外部の存在者の許で存在している。」(SZ 62)

「内 drinnen と外 drau?en」, 「内面と外部」の問題は認識論的にも, 「主観＝客観＝関係」の上でも, 主要な問題である。ハイデッガーの世界＝内＝存在はどうやら, 内にも外にもあるのではなく, その存在仕方は「外にありながら内にある」というものである。これは一見するとヘーゲルの弁証法的な在り方である。これはどう解釈されるべきか問題となる。

- 9 「指示全体を, 現存在にはそれに関わりゆくことが問題である当のものに結び付つけることは, 諸客観からなる事物的に存在している世界に主観と一緒に溶接することを決して意味してはいない。」(SZ 192)

ハイデッガーの有意性の連関においても「主観＝客観＝関係」は排除されている。

- 10 「あらゆる主観はなんらかの客観にとってのみ主観であり, またその逆であるというテーゼを掲げて, 人が立場的なあらゆる定位以前の所に実在性の問題を先立てるという可能性が残されている。だが, このように形式的に発端を置いてみても, 主観と客観の相関関係のそれぞれの項は, この関係そのものと同様, 存在論的には未規定なままなのである。」(SZ 208)

主観＝客観の相関関係を出発点とする, フッサールの志向性等のような問題設定も「主観＝客観＝関係」に結局は立脚しているという指摘である。しかし「主観＝客観＝関係」もその両項も未規定なら, ハイデッガーはそれらをどのように規定するのか。

- 11 「歴史の生起は主観と客観の連鎖に 関係するのであろうか。たとえひとが生起を主観＝客観関係 Subjekt-Objektbeziehung だと見なしても, 根本において生起するのが, その連鎖であるなら, その連鎖そのものの存在様式も問われなければならない。」(SZ 388)

歴史の場面での「主観＝客観＝関係」の問題の指摘である。以上『存在と時間』に見られる「主観＝客観＝関係」への言明一端を引用で外観してみたが, 『存在と時間』の根幹部で「主観＝客観＝関係」は問題とされていることが分かる。

我々はここで原-「存在と時間」というべき『時間概念の歴史へのプロレゴメナ』でのこの問題へのハイデッガーの言及に簡単に触れておく。『プロレゴメナ』でのハイデッガーの論究は実に興味深いものがある。

- 12 「主観＝客観＝関係」の問題については 認識論的には 観念論と実存論という二つの問題解決の立場があることに, ハイデッガーは注意する。前者は主観に, 後者は客観に重きを置く訳である。さらにアヴェナリウスの「第三の立場」つまり「主観＝客観」をすでに存在関係にあるものとして考えるという立場である。(個人的に言わせてもらえば, これはヘーゲルの立場でもある。) これに対してハイ

デッガーは言う。「認識の現象学の課題としてはほめかされたことは、観念論と実存論のこちら側にもあちら側にも立つものではない。現象学はこれら二つの立場の一方にあるのでは決してなく、むしろ、これら二つの立場やその問題設定への定位の全く外部に立つのである。」(Prolegomera 225)

しかし、「立場と問題設定の外部」とはどこか？ それは、どのように二者択一の問題を逃れているのか？

Ⅲ 〈我有り〉への存在論的問い

「主観＝客観＝関係」がハイデッガーで問題されているのであれば、当然その一項である、主観が特に先鋭的に問題とされているはずである。現存在の分析論が現行の『存在と時間』では問題となっており、現存在という問題設定でハイデッガーは主観、自我という言い方を明らかに避けているからである。ハイデッガーは「〈我有り Ich bin〉への存在論的な問い」を提起している。ハイデッガーの自我、主観に対する発言を次に見てみよう。

- 1 「現存在の実存論的分析論は〈我有り〉の存在に対する存在論的な問いを設定するのである。……この分析論の最初の諸課題の一つは差しあたって与えられている自我や主観というものを発端に置けば現存在の現象学的な事態が根底から逸せられるということ、このことを立証することになるだろう。」(SZ 46)

ハイデッガーはここで自我とか主観に対する批判的視点を表明している。

- 2 「主観についてのあらゆる理念は、或る先行的な存在論的根本規定によって純化されていない時には、存在論的にはスブエクトゥム即ち基体〔ヒュポケイメノン〕をいまだに発端に置いているのであって、このことは心的実体とか意識の事物化とかに対して、存在的にどれほど激しく抵抗しようとも、そうなのである。事物性そのものがまずおのれの存在論的起源を証示される必要があって、かくして、主観とか心とか意識とか精神とか人格という事物化されない存在が一体積極的には何と解されるべきであるのかが、問われうるのである。」(SZ 46)

主観についての理念は普通には「基体」つまりスブエクトゥムによって捉えられているという。この「基体」とはハイデッガーの『存在と時間』の用語では事物的存在 Vorhandensein に相当するものであろう。この両者の関係はどのように解されるべきか。ハイデッガーの主観の事物性批判は「主観＝客観＝関係」以上にアリストテレスの「古代存在論」への批判である。勿論主観はドイツ語では Subjekt であり、主観以外にも主語と訳しうるものであり、主語とはギリシャでは「基体」である。つまり

ハイデッガーは主語的主観をここで事物的として批判している。2は「存在的」と「存在論的」の区別に注意して読み解かれるべきである。

- 3 「主観その他の名称が用いられる時には、そのように表示された存在者の存在は問い尋ねる必要は無いという奇妙なことが常に一緒に伴っている。だから、我々がこれらの名称を生命や人間という表現を避けるのと同様に我々自身がそれである存在者を表示するために避けるのは、術語を選択する上で我意を張るからでは無いのである。」(SZ 46)

ハイデッガーは、自らの現存在という術語の選定が恣意的でないことを主張している。以下我有りへの問いの必然性を述べる所を並べてみる。

- 4 「一貫して閑却されたままであるのは、認識を営むこの主観の存在様式に対する問いなのである。」(SZ 60)
- 5 「主観の存在の仕方は、この主観の認識作用が論じられる時には絶えず暗黙のうちに、なんといっても常にすでに主題となっている。なるほどひとは主観の内面や内部は決して箱とか容器とかと考えられているのではないという保証をその都度耳にはする。しかし認識作用が差しあったって閉じ籠められている内在の内面が何を積極的には意味するのか、また認識作用のこの内面存在という存在性格がいかにして主観の存在様式の内にその根拠を持つのか、これらの点については全く沈黙が守られている。」(SZ 60)
- 6 「存在論的に決定的なこと、つまり主観の根本機構、現存在の根本機構は世界＝内＝存在なのだということは、依然として隠蔽されたままである。物的なものとか心的なものが一緒に事物的に存在しているということは、存在的にも存在論的にも、世界＝内＝存在という現象とは完全に異なるのである。」(SZ 204)
- 7 「存在は存在者によっては説明されえず、また実在性は存在了解の内では可能ではないとしたところで、このことは意識の存在、つまり思考スルモノ自身の存在を問うことを免れさせてはくれないのである。」(SZ 207)
- 8 「純粹自我や意識一般という理念は現実的な主観性のア・プリオリなものを含んでいないどころか、そうした理念は現存在の現事実性と存在機構との存在論的性格を飛び越えている、ないしはそもそも見てとっていない。」(SZ 229)
- 9 「世界の構造を規定している有意義性の諸関連はなんらかの無世界的主観によって或る素材の上に蔽いかぶせられた諸形式の網目細工 *Netzwerk von Formen* ではない。」(SZ 366)
- 10 「我々は主観やその内部領域を殻の中にいるかたつむりと比較する。意識の内

在、主観の内在について語る理論に対してこの理論は意識をかたつむりの殻の意味で捉えているという訳ではないとはっきりと注意しておく。しかし、内部や内在がその意味上無規定に届まる限り、ひとがこの内 in がどのような意味を持つか、主観のこの内が世界に対してどのような存在関係を持つかを経験しない限り、我々の類比は否定的なものについてはあの理論に当て嵌まるのである。……這い出すことはかたつむりのすでなる＝世界＝内＝存在 Schon-seins-in-der-Welt の場所的変様であるにすぎない。かたつむりは殻の中にいても、かたつむりの存在は正しく了解された外部にいる。」(Prolegomena 224)

この『プロレゴメナ』には、かたつむりの議論を始めとして興味深い議論がある。Ⅱの7と8に対応した議論である。さて、このようにしてハイデッガーは主観とは異なった、世界＝内＝存在や内＝存在という設定をするのであるが、だが、それはどのようになされ、また成功しているのかが問題となろう。

Ⅳ 現存在と事物的存在 Vorhandensein

現存在は事物的存在 Vorhandensein ではないとハイデッガーによって主張される。さらに、主観の事物化にハイデッガーは抵抗している。しかし、ある意味では我々人間は物的な落下もする物理的対象であり、身長や体重等をも測定できる医学的対象でもある。ハイデッガーはどのようにこれに反対し、後者を彼の哲学の中でどのように説明するのであろうか。

- 1 「エクシステンティアは、存在論的には事物的存在と同じことであって、現存在という性格を持つ存在者には本質上帰属することのない一つの存在様式なのである。」(SZ 42)

先にⅢの2の引用で事物的存在の起源としてアリストテレス的「基体」がハイデッガーによって批判されていたが、ここでは中世的エクシステンティアが事物的存在として、現存在に関して、批判されている。

- 2 「現存在という存在者は、世界の内部で事物的に存在するにすぎないものの存在様式を持ってはおらず、また決して持ってはいない。この存在者は事物的存在者を眼前に見いだすという仕方において主題的に前渡しされてもいない。この存在者が正しく前渡しされていることは自明どころか、このことを規定すること自身がこの現存在という存在者の存在論的分析論の一つの本質的な部分をなすのである。」(SZ 43)

現存在という規定がどのようにになっているのかということは、『存在と時間』の初め

からあきらかな事柄ではなくて、その論稿の中で戦い獲られるべき事柄なのである。

- 3 「伝統的人間学にとって重要な起源、つまりギリシャ的定義と神学の手引きとが暗示するのは、人間という存在者の本質規定に関しては、この存在者の存在に対する問いは忘却されたままになっており、むしろこの存在は自明なものとして、その他の創造された諸事物が事物的に存在しているという意味において把握されているということである。」(SZ 49)

人間に対して諸事物と異なる存在意味をハイデッガーは与えようとしていることが、ここから判然とする。

- 4 「存在論的には我々はこの現存在の誰か *wer* を一つの閉ざれた領域の内でその都度不断に事物的に存在しているもの、優れた意味において根底に横たわっているもの、つまり基体と解する。この基体は様々な別様の在り方をとりながらも自同的なものとして、自己という性格を持っている。ひとは、意識の事物性や人格の対象性を拒否するのと同じく、霊的実体を拒否するにしても、存在論的には依然として、その存在が表立ってか表立たずにか事物的存在性という意味を保有している或るものが、発端に置かれているのである。……現存在は暗々裏に初めから、事物的存在者として把握されている。いかなる場合にも、現存在の在存の無規定性は常にこうした在存意味を含んでいる。けれども事物的存在性は現存在とされるにふさわしくない存在者の存在様式なのである。」(SZ 114~115)

先のⅢの2で明らかなように、ここでもハイデッガーは現存在をギリシャ的「基体」概念に対して独自に立てようとしている。そして、事物的存在性はこのギリシャ的「基体」にその根源があるとされている。勿論この基体＝主語 *Subjekt* (＝主観) という構図がここにはある。

- 5 「それにもかかわらずカントは再びこの自我を主語として、従って存在論的には不適切な意味において捉えているのである。なぜなら、主語という存在論的概念は自己としての自我の自己性を性格づけるものではなく、常にすでに事物的に存在しているものの、自同性や恒常性を性格づけるものだからである。自我を存在論的に主語として規定するということは、自我を常にすでに事物的に存在しているものとして発端に置くことを意味する。」(SZ 320)

ここでハイデッガーはカントが自我を主観つまり主語(＝アリストテレス的基体)として捉えていることを批判する訳である。主観への批判は主観＝主語として、主語＝基体という捉え方への批判である。ところで、事物性は物性として、近世的「主観＝客観＝二元論」批判のコンテクストで問題とされることが多い。⁵⁾ハイデッガーの事物存

在はそのような物化とどのように関係するのであろうか？ 実は、現存する『存在と時間』は周知のように未完の書であるが、その現存する『存在と時間』の最後の数ページでハイデッガーは他ならぬ、この事物的存在性、しかも意識の事物化について問題化していたのである。

- 6 「実存する現存在の存在と、現存在にふさわしくない存在者の存在（例えば事物存在性）との区別のように、極めて明白に思われるものであっても、やはり存在論的問題群の出発点にすぎないのであって、哲学がそれに甘んじうるものではない。古代の存在論が物概念 Dingbegriffen でもって仕事をしているということ、また意識を物化する verdinglichen 危険があることはひとがとうに知っている。しかしながら物化とは何を意味するのであろうか？ 何故存在はまさしく差しあたっては事物的存在者 Vorhandenen に基づいて把握され、そして……道具的存在者に基づいて把握されないものであろうか？ 何故こうした物化 Verdinglichung は繰り返し支配的になるのであろうか？」(SZ 437)

ここで見る限りではギリシャの物概念とハイデッガーの批判の対象である事物存在性は一致しているようである。ただ、ここでハイデッガーは物化の必然性を認めていることが重要である。これが、現行の『存在と時間』の最後の言葉であってみれば、事物性と実存との区別ということは、自明なものでなく、「出発点にすぎない」ものであり、ハイデッガーにとって大変な問題であり、なおも探究すべき問題であったと言いうる。物と基体と主語とハイデッガーの事物的存在者の連関が問われなければならないことは明白である。この物化はさらに先鋭化される。

- 7 「そもそも意識と物の区別 der Unterschiede von Bewußtsein und Ding は存在論的な問題群の根源的展開にとって十分なものであろうか？ そして存在一般の意味への問いが設定され明瞭にされないままである限りは、その答えは捜すことだけでもなされるのであろうか？」(SZ 437)

ここでの論点のすさまじさは事物化に反対しながらも、その必然性を認め、それをどのように解すべきかとする点である。ハイデッガー自身は現存在は事物的存在者ではないのだ。おしまい。というような論法を採らないのである。心身問題についても、現存在や世界＝内＝存在が心身関係では捕らえられない。おしまいとはしていないのである。二元論は我々には、避けるべきであるにしても或る程度は宿命的、運命的であることを認めているのである。

V おわりに

心身問題と「主観＝客観＝関係」に対する先鋭な問題意識を持つハイデッガーは認識関係についてもラジカルに批判的視点を持っていて不思議はない。内＝存在、世界＝内＝存在というのがハイデッガーの観点であるが、それは従来認識論の問題設定をターゲットにする。『存在と時間』では特にカントが槍玉に挙げられるが、それより数年前の『時間概念の歴史へのプロレゴメナ』では同様の観点からラジカルにフッサールを批判吟味しフッサール現象学の基本概念というべき「志向性 *Intentionalität*」は「世界＝内＝存在」で置き換えられなければならないことを提言している。このハイデッガーの大胆な発言は、今まで現象学研究者の文献で触れられたことがない問題群、つまり「志向性と世界＝内＝存在」問題を喚起するであろう。この「志向性と世界＝内＝存在」関係は一種の「主観＝客観＝関係」問題であることは自明であろう。世界＝内＝存在や現存在等のハイデッガー『存在と時間』の道具立ては、志向性との対決から生じてきているとも言い得るのである。勿論志向性とは「あるものについての意識」であり、ハイデッガー自身の指摘によれば、その限り「主観＝客観＝関係」に基づいていると考えられている。志向性の問題がやがて「主観＝客観＝関係」の問題へと拡張されていったのである。

認識に関しては『存在と時間』に関してはすでにその問題性は、Ⅱの引用4と6で言及した。『存在と時間』では実在性の問題が主にカントを引き合いに出しながら論じられている。「実在性の問題を解決しようとする認識論的でしかない試みが、暗々裏に前提しているところを検討してみると、この問題は存在論的問題として現存在の実存論的存在論の内へと取り戻されなければならないということが示される。」(SZ 208) 同様の指摘は『プロレゴメナ』215～216頁にもある。「認識論の根本的欠陥はまさしく次のことである。すなわち、認識論が認識作用で思念していることを、認識の根源的な現象的状态において現存在の存在様式として、つまり現存在の内＝存在という存在様式として見て、その根本考察から出発して全てをこの土台に基づいて今や始められる問いをしっかりと捉まえていないことである。」(Prolegomena 217)

この種の指摘は『存在と時間』において認識論、実践論、真理論、学問論等という具合にその外延を広げて行くのである。そのことは容易に推測できるであろう。しかし、ここではこれ以上の論究は出来ない。

とはいえ我々は、心身問題や「主観＝客観＝関係」の問題が、『存在と時間』のハイデッガーにおいて自らの問題設定や概念装置の為に重要であることは十分確認できた。我々は以上の問題へのハイデッガーの取り組みをいよいよ跡付けなければならない

いが、その前にこれら「主観＝客観＝関係」問題や心身問題と、『存在と時間』とにとって重要な時間の問題を論究すべきである。それは「時間」の持つ「存在論的機能」である。この「時間」の持つ「存在論的機能」とは簡単に言えば「時間」が心的領域と物的領域との、つまり「主観＝客観」の存在区分の原理となっているということである。『プロレゴメナ』ではフッサールの志向性における両項の存在の区別をするものの問いが欠けていることが指摘されている。⁶⁾ (Prolegomena 158) この区別をするものは「存在の意味」であり、そして、この「存在の意味」は「時間」である。このようにして、「時間」は主観と客観、心身の区分の原理なのであり、『存在と時間』の用意した「存在の意味への問い」に深層部で繋がってゆくのである。⁷⁾

(1988. 9. 19)

註

引用は次の略記による。なお引用箇所の強調等はすべて、私自身に由来する。

SZ……Martin Heidegger, Sein und Zeit, 1967 (第11版)

但し Randbemerkungen 等は1984年の第15版や全集版を参照した。なお引用に際しては、原佑・渡邊二郎訳、中公パックス、世界の名著74、昭和55年を使用させていただいた。引用に際して一部前後関係から変更させていただいたことをお詫びしたい。

Prolegomena……Martin Heidegger, Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs, Gesamtausgabe, II. Abteilung, Bd. 32, 1980

なお次の英訳も参照した。Martin Heidegger, History of the Concept of Time, Prolegomena, translated by Theodore Kisiel, Indiana University Press, 1985

- 1) 以上の事実は現存する『存在と時間』の日本語訳に付属する事項索引や用語索引をひも解けば誰にでも明らかな事実であろう。私の所有する限りでは、そこには「身体」「肉体」「主観＝客観＝関係」という項目がない。勿論だからといって、これらの業績の価値は全然減るものではない。
- 2) cf. Briefe über den »Humanismus«, Wegmarken, 1967 ハイデッガーの存在の問いには人間の存在への問いが必ず付着している。本稿はこの必然性を明らかにする為のほんの助走である。「形而上学はどのような仕方て人間の存在が存在の真理に属するかを問わない。この問いを形而上学はこれまで立てなかったのみならず、この問いは形而上学としての形而上学には接近不可能である。」(同書S. 154) この論点については下記注7の拙稿でとりあげた。
- 3) 世界的に見ても心身関係とハイデッガーを論じているのは、次の論文だけである。G. Fløistad, Introduction, Contemporary Philosophy, Vol. 4, Philosophy of Mind, Martinus Nijhoff, Dordrecht, 1983, 1986, p. 2, 6 それもハイデッガーは世界との関係において主観を考えたスピノザの伝統に繋がるという簡単な指摘であるにすぎない。
- 4) この関連では「存在の意味への問い」の独自性を解明し、ハイデッガーの現象学的精神である、「実際の探究の主題として問う」という哲学的態度を解明した次の拙論を参照していただければ有り難い。拙稿、存在の意味への問い、『存在と時間』研究覚え書き、千葉大学教養部紀要A-16(上)、1983年5月10日。

- 5) 勿論ハイデッガーはデカルトについても事物的存在性を基に現存在を把えていると批判するが、マリオンは最近ハイデッガーに逆らって逆に言わなければならないとしているのは興味深い。つまり、延長した、世界内部的存在者の存在はレス・コギタンス *res cogitans*, 自我をモデルにしてデカルトでは把えられているというものである。(Jean-Luc Marion, *Ego autem substantia*, *Philosophisches Jahrbuch* 95, 1988, S. 70)
- 4) これは、既に前記拙稿で言及しておいた。前記拙稿。13～14頁。
- 7) 時間のこの「存在論的機能」については近刊拙稿, 身体と時間, 法政大学教養部紀要・人文科学編 70号, 1988年12月刊行予定を参照していただきたい。

(ほし としお 本学非常勤講師 哲学)